
気が付いたら、攻略されそうです・・・～キャラ変更編～

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら、攻略されそうです・・・〜キャラ変更編〜

【Nコード】

N6647Z

【作者名】

零堵

【あらすじ】

目が覚めると、俺は女の子になっていたしかも、なんか見た事あるな・・・と、思っていたらゲームのキャラになっていた。しかもメインヒロインとなっていた。

このままどうなるのか？全く解らなかつたが、とりあえず

「主人公とのラブイベントを回避」と言う方針で動く事に決める。

そんな、性転換した彼女の物語

気が付いたら、攻略されそうです・・・の番外編みたいな感じだと思えます。

〜プログラク〜(前書き)

零堵です。

投稿します。

くプロローグ

気がつくと、そこは見知らぬ天井だった。

「あれ・・・ここは・・・って、声か!？」

自分の声を聞いて、驚く。

何故なら、女の声だったからで、少なくとも男の声ではなかった。慌てて体を確認してみると、大きい胸をしていて、これでもう自分が、男では無く女になったんだと、実感してしまった。

「何でこんな事に・・・?確か、俺は、家でゲームをしていたのに」
どうしてこうなったのかよく、思い出してみる。
家でゲームをしていて、気がついたら、この場所にいるのであった。あまりの突然の事で、パニックになったが、冷静に考えてま、なつちやた物はしょうがないか・・・諦める事にした。
ところで、一体誰になったんだ?と思い、鏡を探してみる。
部屋の中には鏡は無く、あるのは、勉強机とベット、それに箆筥ぐら이었다。

これじゃあ、自分が誰になったのか、全く解らなかったので、部屋の外に出てみる。

廊下はちよつと広く、なんか見覚えがある光景だった。

鏡がある部屋を見つけたので、そこで自分の姿を見てみて、驚いた。

「え・・・西村舞!？」

そう、俺の姿は、西村舞となっていたのである。

しかも既に、制服の姿になっていた。ちなみに西村舞と言うのはゲーム「ラブチュチュ」のメインヒロインである

幼馴染の初崎孝之と隣同士の家で、よく孝之の事を起こしに行く、ギャルゲーとかに出てくる

よくあるヒロインなのであった。

「という事は・・・ここは、ラブチュチュの世界なのか!？」

そう言ったら、俺に声をかけて来る者がいた。

「舞、どうしたのよ？」

赤い髪をして、ショートカット姿で、舞の顔に少し似ている人物だった。

と言う事は・・・この人が、西村舞の母親

西村恵子さんだと思う。

「い、いや、何でもないよ」

「そう?それより、孝之君、まだ寝てると思うから、起こしに行くんじゃないの?毎朝、そうしてたじゃない?」

「あ、う、うん、じゃあ、行って来る・・・」

ここで、いつもと違った行動をすると怪しまれるので、外に出る事にした。

外に出て、隣の家に向かい、ゲームと同じ台詞を言う。

「孝之、起きなさい!朝だよ」

そう言ってから、数分後

「舞、そんな大きな声で言うなよ、恥ずかしいだろ!？」

そう言っ出て来たのは、主人公の初崎孝之だった。

改めてみると、結構なさわやか青年って感じがして、なかなかの美形だったりした。

こいつが、色んな女の子と付き合う可能性がある奴かなんかむかつくな?このリア充め!

そう思っていると

「舞、学校だと言うのに、手ぶらで来たのか?鞆忘れてるぞ?」

「あ、確かに・・・ちよつと持つてくるよ、先行つてて」

「いや、待つてる」

何でだ?と思っただが、まあ深く考えない事にして、自分の家に戻り

鞆を持ち出して、外に出る。

そして、主人公と一緒に登校する事になった。

登校途中

「そろそろ夏だよな」

「な、夏？」

「夏だよ、明日から七月じゃね〜か」

「そ、そうなんだ」

「どうした？舞？なんか変だぞ？」

「い、いや、大丈夫よ、気にしないで」

「そうか？」

と言う事は、今日は六月三十一日で、明日から七月に突入って事なのか・・・

確か、ゲーム「ラブチュチュ」だと、七月八日で、ゲームが終了した筈なので

これからどうするか・・・考えて、結論はと言うと

「主人公とのラブイベントを回避」すると言う方針で動こうと思っ
た。

この先何が待ち受けているのか、全く解らなかったが
何とかやっていくか・・・と思い、学校へと向かったのである・・・

↳プロローグ↳(後書き)

気が付いたら、攻略されそうです・・・のキャラ変更編です。

まあ、番外編？みたいな感じかもしれませんが。

この物語は、暇ができれば、投稿したいと思います。

〜第一話〜一日目〜学校潜入〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第一話〉一日目〈学校潜入〉

主人公の初崎孝之と歩いて、辿り着いた場所は

「私立白稜高校」と書かれていた。

うん、ゲームとまったく同じ名前の学校なんだな・・・

と言う事は、この世界は、ラブチュチュの中の世界なのか？とか思ってしまった。

「どうした？舞？」

「ううん、何でもないよ」

「そうか？ま、いいけど」

そう言つて、主人公はスタスタと校舎の中に入っていく。

俺も、中に入り、自分の上履きを探して、何とか見つけて、それに履き替えて

自分のクラスを探す事にした。

ゲームどおりなら・・・と思い、二年二組の教室の中に入る。

教室の中に入つても、誰も驚かないので、やっぱりここで合ってるんだな・・・と実感し

ゲームと同じ席に座る。

隣に主人公の孝之がいて、窓際にもう一人の攻略対象キャラの沖島ユウが座っていた。

沖島ユウがいるって事は、やっぱりここはラブチュチュの世界なのか・・・

ま、来ちゃったものはしょうがないとして、何とかなるだろう・・・と思う事にした。

そして、キーンコーンとチャイムが鳴り、先生が入ってくる。

先生は男の先生で、声を聞くと、やっぱりゲームに登場した先生の声と全く同じだった。

授業内容は一体どんなんだ？と思い、とりあえずまじめに聞いてみる

元いた世界と全くと言っていいほど、変わってはいなく
普通に問題が解つたりしたので、何とかなった。

時間が過ぎていき、お昼になった。

お昼は、どうしようか・・・と悩んで

この世界だと、学校に学食があるので、そこに行く事にした。

学食に行こうとする

「あれ？舞、今日は弁当じゃないのか？」

孝之が話しかけてきた。

そうか、確か、舞は毎日弁当を作って、教室で食べてたな？そうい
えば・・・

「ちよつと、寝坊しちゃって、用意してないの」

「何言つてんだよ、俺の事、朝、迎えに来たじゃないか？少なくとも
も、作る時間はあつたはずだぜ？」

「でも、作るの忘れたの、だから学食行くのよ、何か文句でも？」

「いや・・・ただ、いつもと違うなって思ったただだよ、俺も学食
行こうかな・・・」

そんな事を言つてたので、ほつとく事に決めて、学食に向かう事に
した。

学食に着くと、人がたくさんいて、券売機の前に並んでいる。

俺もその列に並んで数分後、俺の番になり、何にしようか悩んで、
きつねうどんを押しした。

お金を入れる投入口がないので、無料つて事には驚いたが、深く考
えない事にした。

きつねうどんの食券をカウンターに置くと、すぐにきつねうどんが
出てくる。

空いている席を見つけたので、そこに座って食べる事にした。

移動してて思つたのだが、胸が大きいから、歩くのに少ししんどか
った。

とりあえず思つたのは、自分が女になるんだつたら貧乳、見るんだ
つたら巨乳だな・・・と思つたのである。

きつねうどんを食べ終わって、教室に戻り

これからの事を考える。

この体、西村舞になったと言う事は、主人公とのラブイベントはあるわけだから

それを回避するには・・・と、考える。

とりあえず誘われたら、断ると言う方針で動こうと決めて

午後の授業に専念する事に決めたのであった・・・

〜第一話〜一日目〜学校潜入〜（後書き）

こっちの物語も投稿します。

お気づきかと思いますが、「気が付いたら、攻略されそうです・・・」

「と違う所がひとつだけあるのを解りますか？

そう、違うのは、日付なんです。

あっちでは、七月一日が月曜日となっていました

こっちでは、七月一日は火曜日となっております。

よく確認してみると、解りますよ〜

これからも、この物語をよろしく願います。

〜第二話〜 一目目〜午後、部活動〜(前書き)

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第二話〜 一日目〜 午後、部活動〜

午後の授業も普通に終わった。

授業が終わったので、どうしようかと思っただが、確か

西村舞は、部活動に入っているの、部活動に参加する事に決めて教室を出る。

西村舞の入っている部活は、陸上部なので、グラウンドに向かった。グラウンドに向かうと、ジャージを着てホイッスルを首に掲げているいかにも

体育教師らしき人がいて、ジャージのネームプレートに「山本」と書かれてあった。

「西村、まだ、着替えてなかったの？部室で着替えなさい」

「え〜っと・・・部室って・・・」

「忘れたの？あそこよ？」

そう言っ、プレハブ小屋を指差す。

「あ、はい、あそこですね、じゃあ、着替えてきます」

そう言っ、俺は、プレハブ小屋の中に入る事にした。

中に入ると、他の人が着替えていたりしている。

これっ、男だったら天国な光景なのではないだろ〜か？

まあ、俺は女になってしまったので、ちょっと残念な感じがしてしまった。

空いているロッカーを探していると、西村と書かれたのを見つけたので、そこを使う事にした

ロッカーの中に入っていたのは、青色のジャージとズボンだった。

うん、ブルマ姿では走らないのか・・・

まあ、ゲームの中でもブルマ姿は見た事がなかったからな・・・

俺は、着てる制服を脱いで、ジャージに履き替える。

うん、胸が大きいから着にくかったが、なんとか着れた。

ジャージに着替え終わっ、プレハブ小屋から出て

先生らしき人に指示された通りに、並ぶ事にした

「じゃあ、今日は、百メートルのタイムを測るわ、皆、準備して」
そう言つて、走る準備をしているので、俺も準備する事にした
他の人のタイムを見てみると、速い人がいたり、遅い人がいたり、
結構まばらだった。

「はい、次、西村」

「あ、はい！」

俺も、スタート位置に並ぶ。

山本先生が、ホイッスルを口にくわえて、こう言つた

「よい、スタート！」

そう言つたので、俺は走り出す。

走り出して思つたのだが、胸が大きいので、走りにくく、バランス
が悪いので

転びそうになりながら、なんとか完走する事に成功した。

先生が、タイムを見て、こう言つてくる。

「西村、前よりタイムが落ちてるわ、この調子だと県大会には出せ
そうにならないわよ？頑張りなさい」

「は、はあ・・・」

別に、頑張りたくはないんだが・・・

そんな感じに部活をやつて、夕方になった。

夕方になって、先生がこう言つ。

「はい、今日の部活はここまで、各自体を十分に休めるように、
で、解散！」

そう言つたので、俺は、帰る事に決めて、プレハブ小屋の中に入り
制服に着替えて、外に出る

外に出ると、もう日が沈んでいて、結構真っ暗になっていた。

寄り道しないで、俺はと言つと

真っ直ぐ、帰る事にしたのであった・・・

〜第二話〜一日目〜午後、部活動〜（後書き）

こっちの物語も、投稿します。

これも書いていて、ちよつと楽しいかも・・・って感じですかね？
これからも、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6647z/>

気が付いたら、攻略されそうです・・・～キャラ変更編～

2011年12月24日01時51分発行